

第 10 章の 1 『^{「てんくうしやつきょう」}天空石 橋』

1. 『^{「てんくうしやつきょう」}天空石 橋』発見の経緯

2022(令和 4)年 9 月 10(土)晴れ、午前中、宮林と大沼は、「高清水通り」の諸調査ために、西川町姥沢口を出発し、月山山頂に登拝後、本通りを本道寺向けに下った。

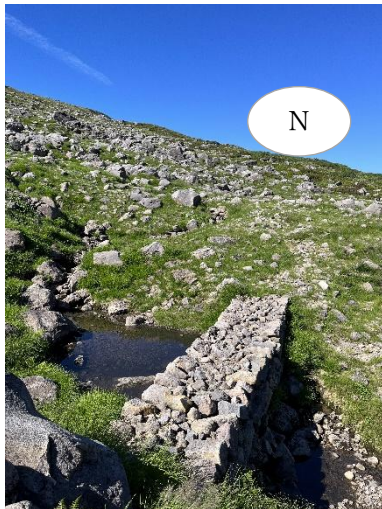
図－1、この時点における大雪城帯域の従来ルート安全向上対策の観点で探査しながら下山する途中、胎内岩の下方（南方）において、大雪城上従来ルートから約 50m 東方に離れた旧道ルート上でまったく予想外のものに遭遇した。**最初に気付いたのは宮林で、同行していた大沼が合流し両者は驚愕し絶句した、“これは何なのだ！”**



図－1

2. 現況

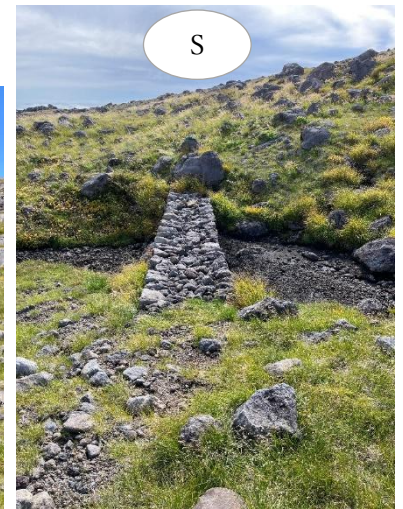
状況は図－2 (a は発見当時、b・c はその後) のとおりの「石で組んだ橋（堰堤、石堤）」である。鉄線などによる捕縛はしていないが、しっかりと石を組んでいる。残雪・風雪に耐えて少しも崩れていない。見ようによっては天空と結ぶ、天空に架けた橋と直観した。**初見時は、一瞬堰堤（石堤）酷似もよぎったが、それよりも印象深く見えたのは橋であった、現地の石で組んだ堰堤にも見える中で、渡り歩く物という視点から橋と主眼した。**石橋と川流れとの向きに着目する。図－3 のとおり、橋軸方向と川筋は互いに垂直関係にはない。なお、現地前後を見ると、**橋軸の向きは明らかに旧道筋に沿っている。**初めて出会った時の直感だが、天空と火・水（神）と仏のコラボレーションという思いが湧いた。太陽が降り注いだ陽（火）の化身青空と、太陰（月）が降り注いだ雨露の化身水溜めとの共演である。二人はここを大雪城より滴る水源と崇め奉り拝礼合掌した。



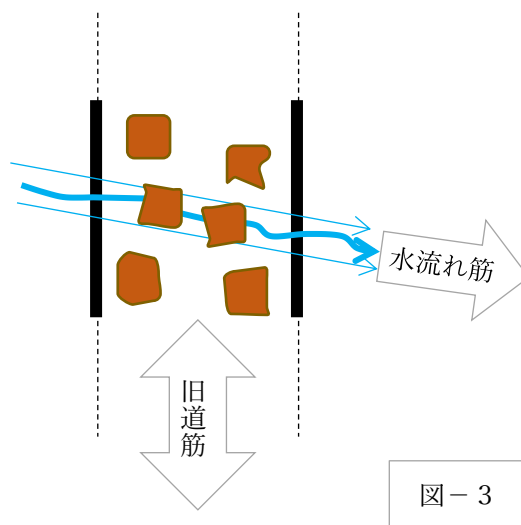
図－2 a



図－2 b



図－2 c



図－3

形状寸法の概数

長さ約 7.5m

高さ約 1.2m

幅約 1.2m

特徴点は次のとおり。

- ・¹旧道ルート（復元新ルート）上にある。
- ・²大雪城の融水が集まって川流れとなり、ここに小さな水源池を形成している。
- ・³人為的・人工的な石組みであり、精巧であること。
- ・⁴人工物の鉄線などによる捕縛・金縛りはなく、また、コンクリート等の固着剤は一切使用していない。
- ・⁵しっかりと石を噛み合わせており、積雪・残雪・風雪に耐えて少しも崩れていない。
- ・⁶手前（片側）支持点に大きな石がある。

月山を目指して歩くだけ、あるいは、本道寺を目指して歩くだけということからは、周囲にはもちろん樹木はなく砂利道状態なので、ここに橋がなくてもいくらかでもルートは取れる。なお、この橋の前後に点在するケルン目印岩を結ぶと旧道ルートになる。しかし、ここになぜ橋を架けたのかという理由があるはずである、今となっては一見、不要・無用と思われる石橋をなぜこんな場所に造成したのか、経緯を明らかにすることが最大の課題である。

そこで、後日、月山に係る様々な関係者（出羽三山社務所、月山小屋関係者、手向宿坊関係者、月山に精通した登山愛好者、本道寺周辺の長老、西川町役場関係者、西川町土木建設会社、知人・友人など）に聞き取りを行ったが、「初めて見た、存在そのものは今まで知らなかった。」という声である。

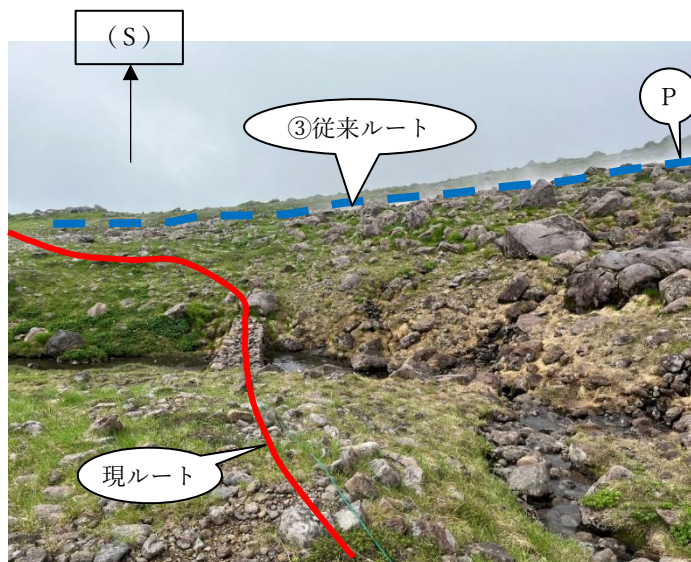
その後、“あるのは分かっていた”という人が何人か表れたということになっているが、それは、今になって、このように公表し、こちらから積極的に問いかけたことにより反応したものだろう。しかし、本件のような問題意識を発現し、課題解決に向けた動きはまったく存在しなかったのである。

3. そもそも、なぜ、同橋が認知（発見）されずに、公にされずに今日（その時）までに至ったのか？

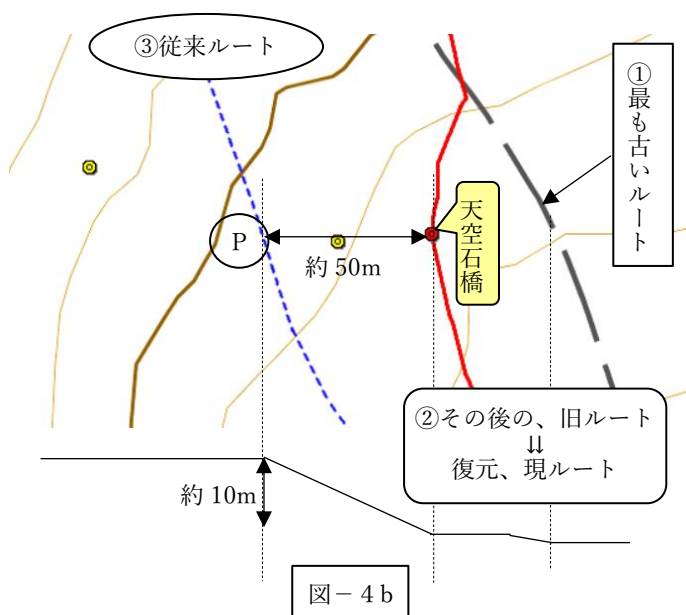
天空石^{しゃつきょう}橋と道との位置関係（細部）について図－3のとおりに整理する。昔の旧道は、凹部に道を取ったことから長年の水流により、道筋が掘れて段差が出来、岩石が表れ非常に歩き難くなった。そこで、「大雪城」残雪の上を直登するようにロープを張って来た、このルートが通常ルートとして定着したのだろう。（なお、本来は秋にロープを回収し、翌年初夏にロープを雪上に張るという作業が必要であったろうが、近年は年中張っ放しになっている。）



主な理由について図－4をも合わせて考察する。



図－４ a



図－４ b

次の４点が複合していたからだと考えている。

- 1；大雪城雪上直行の従来ルートから約 50m 東で、かつ、約 10m 低い場所にあること。
- 2；掘れて近年は使っていない旧道ルートにあること。
- 3；一般的な登山シーズンが終わった融雪後に全体の姿を表すことから人目に付き難かったこと。

このような地形において、従来ルート上（P 点）からは、東方向の岩石が支障となり天空石橋は視認出来ないことを確認している。

□ 4；あるいは、設置過程に問題があり、意図的に公にして来なかったこと。（後述するが、こちらの方が真実だったのか？）

4. “ここになぜ！ 架橋の理由は？”

2025(R7)年 6 月 10 日（火）現在、そのものを直接説明出来る書類の入手や存命者からの確たる証言を得ていない段階だが、ここに造成・架橋した理由・事情について、考えられる（想定可能な）要点を図(表)－5 のように整理した。まずは大きく二つの側面に分ける。どんな理由があったにしても、人工的なものであり、今となっては素晴らしい遺構である。

(1) 現実的・実利の側面	(2) 精神的・宗教性（信仰）の側面
一つ目の命題は、大方の直感としては、人の水要求（欲求）に供するものとする観方。	二つ目の命題は、少し深読みをし、「水に対する宗教性・信仰性」に係るものとする観方。
・飲料水供給用「水瓶・水源池」造成 ・融雪水の流量調節ダム機能造成 ・機械の冷却等に係る何らかの工事の残骸（未撤去）ではないか。そうであれば今となっては産業遺構の一つである。	a. 源流信仰・水源信仰に係る祈りの舞台と見立てた遺構ではないか。五穀豊穰、子孫繁栄の源は水である。月山南方麓の集落の、——もっと広く見れば内陸側の人々とから見た場合、何かにと恩恵に授かる水はどこから来るのかとなれば、理屈なしにそれは月山が湛える水だと想起する。 b. 橋そのものを堰堤と見立て、水の調節機能を託し、調節加護の祈りを受け止めてくれる水神様の住まう宿の遺構とも捉えられる。

図(表)－ 5

(1) 現実的・実利の側面

「水瓶・水源池」の観点である。それではその水をどこで何に使ったのか——飲料水用なのか、その他の生活用水なのか、何かの工事用（エンジン冷却用等）だったのか？ となる。

a. 月山山頂との関係性

考えられるのは、月山山頂の神社本宮——夏場開山中は神職が寝泊まりする——における飲料水・神水として使用する、あるいは山頂小屋での飲料水などの生活用水として使用する等がある。当該関係者からの聞き取りによると、過去においても、そのような目的でここを水源池にしたことは絶対にない^{N o n}、ということ。現在は、2022(R4)年9月14日（水）～15日（木）月山山頂小屋に泊まって来たが、エンジン音からすれば、小屋の真東下の残雪融水（通称「月見ヶ原」の域？）を汲み上げている状況に見えた？

b. 廃止された鍛冶小屋との関係性

その1；老朽化により平成15（2003）年秋に撤去されたとのこと。渡辺幸任著「出羽三山絵日記」旧版P338に「・・・風呂の横には大桶があり、水樽で十六回背負うと満杯になった。・・・雨の時も大桶は満杯にしておかなければならなかった。・・・」とある。 雨水をろ過して飲用化するのはここだけに限らず、往古より山小屋において行ってきたことであり何も珍しいことではない。しかし、「背負った」とあり、どこからかという素朴な疑問が出て来た。 図-6を参照しながら図(表)-7のいずれかでないかと想像して見た。

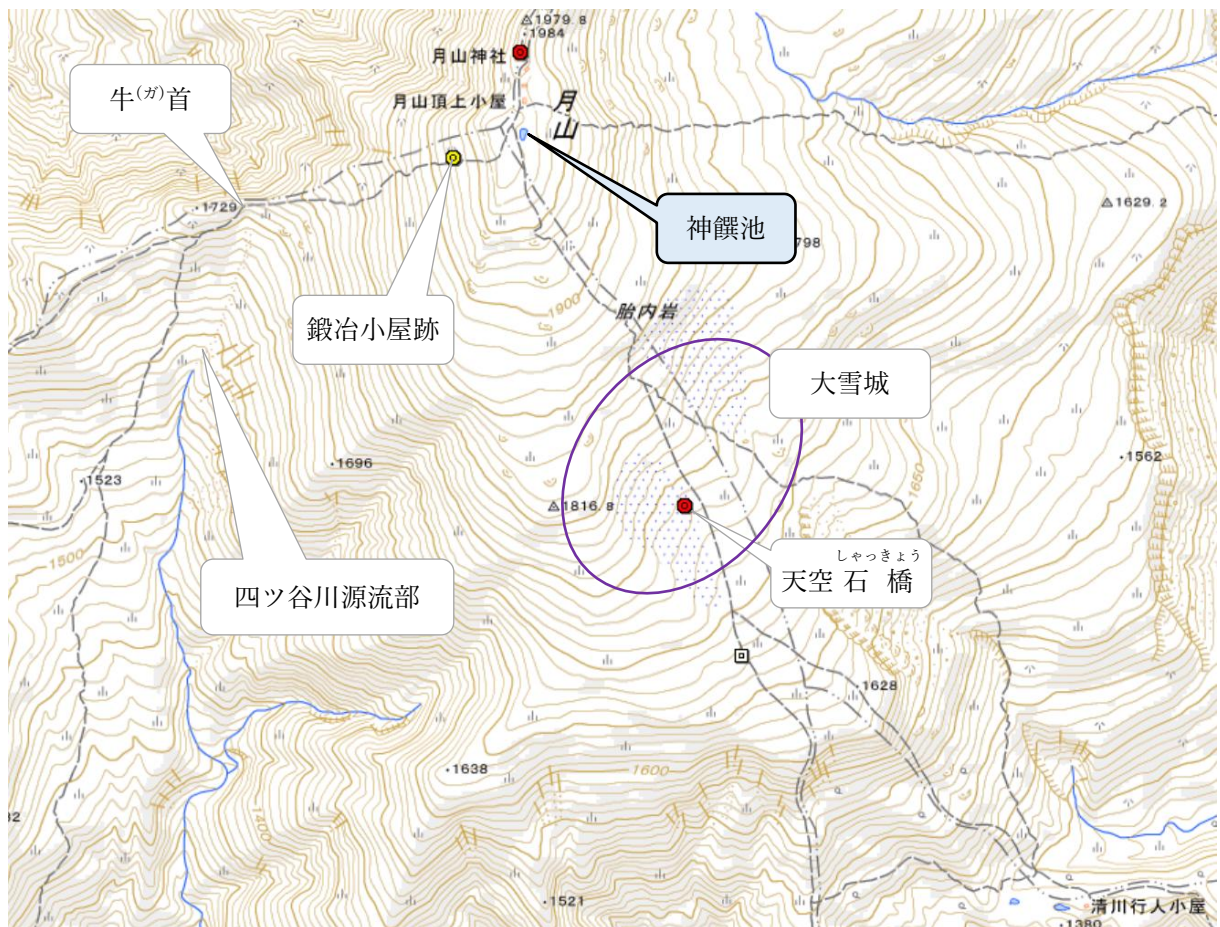


図- 6

- 1；牛首を源流とする四ツ谷川から背負った。
- 2；胎内岩下の大雪城から背負った。
- 3；月山山頂の神饌池から背負った。

図(表)－ 7

□ 1～牛^(ガ)首と同小屋の間は、月山登山ルートにおいては一・二を争う急坂で、その最難関の区間を背負う必要があり、効率的ではない。

□ 2～山頂から大雪城までの区間は□ 1 区間よりも平均斜度は緩くても、季節にもよるが距離は倍ほどになり、これも余り効率的ではない。

□ 3～神饌池から背負うこの手法が一番現実的であろう。神饌池の溜水は雨水（自然水）であるが、今でも周囲にホースの残骸が周辺（直下）の残雪融水を汲み上げた可能性はある。

しかし、神饌池はその字義のとおり、月山神社本宮の月読命^{ごしんせん}に御神饌する水の池であるから最高に神聖な場所である。いくら精進潔斎を図ったと思われるものの、禍事・罪・穢^{まがごと けがれ}で汚れ切った煩惱深き娑婆の人間に対する飲料水源とすることは憚れる、表向きは絶対に許さないとなるだろう。実は、昨年、2022(R4)年 10 月 4 日（火）8 時 50 分～9 時 5 分、出羽三山神社社務所を訪ねて 3 人と対応した。結論は「鍛冶小屋で利用した水の出所は分らない、ましてや、神饌池の水利用は有り得ない、許さない。」ということであった。

いや、図(表)－ 8 のような考えのもとに、神饌池の水利用は何も問題なしという主張もあるだろう。

- ✓ 1；禍事・罪・穢^{まがごと けがれ}で汚れ切った煩惱深き娑婆の人間と雖も、精進潔斎の祭儀（禊ぎ、お祓い）をきちんと果たして登れば、きれいになっている身なので問題はない。
- ✓ 2；月山大権現、すなわち月読命は、偉大なる寛容性を持っており、“使うな”などとそんなケチなことは言わない。
- ✓ 3；月山は祖霊・祖神の集結している所故に、今世に生きて困っている人達をむしろ援けるだろうから、ここよりの水の利用は大いに喜んでくれる。

図(表)－ 8

だからと言って、「神饌池」と名の付く池から飲水として簡単・安直に利用出来るのならば、神も仏もへったくりもない、秘所も聖地も何のことはなく、月山神社本宮（月読命）への神職の奉仕は偶像崇拜の何ものでもないということになる、神仏は崇拜対象に値しないことになる。であるからして、図(表)－ 8 の言い分には組みしなないとなるだろう！

その 2；以上は人力で背負うということで展開したが、ある時期から動力ポンプの使用ということも考えてみる。図(表)－ 9 の 3 通りが考えられる。

- ✓ 1；牛(ガ)首までホースを這わせて、四ツ谷川から汲み上げた。
- ✓ 2；大雪城までホースを這わせて、融水を直接に鍛冶小屋に汲み上げた。
- ✓ 3；大雪城までホースを這わせて、天空石橋貯水を一旦神饌池に汲み上げて、そこからまた鍛冶小屋に汲み上げた。

図(表)－ 9

この天空石橋の貯水量はざっくり大き目に計算して、幅 7.5m×高さ 1.2m×奥行 10m=90 m³である。当時のポンプの吐出能力は知る由もないが数時間でなくなるだろう。果たして、真実は如何に？ いずれにしても、どんな所であっても神の領域に入っては、建前と本音が交錯し、真実は分からない、分からないとするのが、日本人的であろうからこれ以上の追及は無駄ということで収めることにする。

c. 清川行人小屋との関係性

その 1；「昭和 30 年 6 月 4 日、高松宮殿下が岩根沢から登られ夏山スキーを楽しまれたが、その前年昭和 29 年に清川行人小屋は今の状態に大規模改修（建て替え）した。」ことの状況を踏まえて、工事業者や関係者が一時期常駐・寝泊りしたことだろう。あるいは、本件石橋と清川行人小屋の間のどこかに、表れた登山道整備のために工事業者の休憩用仮説飯場を設置した可能性もある。

以上の状況に鑑みて、工事期間中の給水確保に資する水瓶・水源池・貯水池造作のための堰止堤体の跡ではないのか。工事完了後、本来撤去すべきものを撤去せずに自然放置されたものではないか、つまり、仮設の残骸（遺構）であろうという見方も出来る。一方で、給水確保ならば同小屋の後ろに清川があるからそこから引けば簡単ではないかという見方が出て来る。しかし、それは動力源ポンプアップを要し大掛かりとなろうか。しかし、上流部の大雪城融水利用からはパイプを繋げばよく自然流下で工事は容易になる、しかし、これとて、距離は長くなる。なお、本件石橋から同小屋までは約 1.5km 弱（標高差約 372m 下り）、同小屋から清川までは約 210m 弱（標高差約 41m 上り）である。

しかし、現在の同小屋の水は、北西後方、手盡坂の沢から引いている。

その 2；戻って、登山道の整備等も考慮すると、工事をする期間は大雪城がほぼ融けた晩夏から秋にかけて望ましく、すなわち対応期間限定となり、単年で終了せず数年前から携わったとする推測も可能である。例えば昭和 27（1952）年から着工したと仮定すれば、本年令和 4（2022）年からは 71 年前である、逆に当時 20 歳の人は今では 91 頃歳を超え、昭和 29 年で 20 歳の人は今では 89 歳である。果たして、根拠書類を以って当時を正確に語れる存命の人はおられるものだろうか。

その 3；いずれにしても、過去を正確に検証するためには、①当時直接工事に従事した人間の証言と②実施記録の文書（計画書ではだめ）を以って、つまり、5W1H——「When：いつ」「Where：どこで」「Who：だれが」「What：何を」「Why：なぜ」「How：どのように」からなる情報伝達要素を以って 100%・完全復元出来てこそとなる。しかし、それは不可能というものだから、今となつてはより真実に近付ける努力を傾注しつつも想像・想定・推測する他はない。したがって、様々な説が出るだろうが、この説が絶対正しく、あの説は間違っていると断定的に・独断的に区別出来るものではない。

d. 丸山茂著「神部 岩根澤之面影」にあること

325 頁より抜粋・引用する。「二 月山の万年雪・・・さて、おほゆきじろの吟味にかかってみると、表面の方全体東南に向かって下り、その端に融解の水から成れる小さな池がある。池尻は一寸流れて間もなく岩の間に浸み込んでしまっている・・・」とある。2022(R4)年秋は、2022(R4)/9/10(土)、2022(R4)/9/14(水)～15(木)、2022(R4)/10/1(土)、2022(R4)/10/13(木)大雪城に行っており、融解水による小さな池状の所は何箇所か見付かったが、どれを指しているのか、この度見付けた「天空石橋」のことなのかどうなのか？ 興味が尽きない。

e. ある素朴な疑義

ところで、一時の「水瓶・水源池・貯水池」造成のために、あれだけの精細な石積みをするだろうかという疑問がある。一時の単なる水瓶とするのなら、石を無造作に荒っぽく並べて、ただし、水漏れ防止のためにシートを分厚く巻けばよいとならないだろうか、その兆候は見当らない。また、2022(R4)年10月1(土)には水は完全に枯れていた。以前は温暖化が進んでいないので残雪は遅くまであったと思う。しかし、そうすると、水瓶はもっと下流側でよかったのではないかという疑問も出て来る。

f. 動力ポンプ残骸との関連性有無

その1；東南方向に撮った図-10aと同図bは正確に対応させたものではないが、同図b(A)地点には、図-11のような廃棄した動力ポンプ小屋跡がある。図-10ab(B)地点にも同様に廃棄したと思われるポンプ小屋がある。また、その下流(C)地点には2022(R4)10月13日(木)現時でも満々と水を溜めた池が見える。もちろん、今は(A)と『^{しゃっきょう}天空石橋』間にはパイプ敷設などの残骸はない。『天空石橋』と(A)、あるいは(B)との関係はあるのか、ないのか、なさそうだが。果たして、その残骸は別の疑問を持ち上げてくれる。

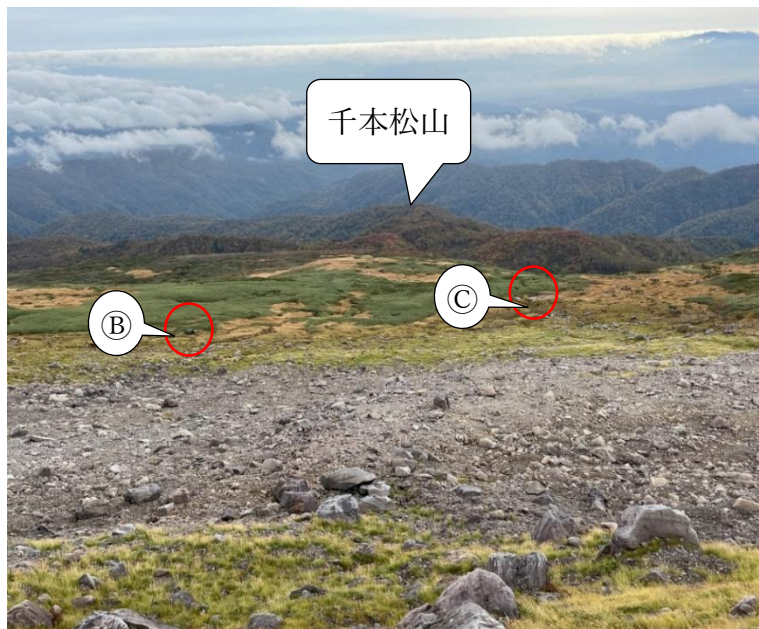


図-10a



図-11

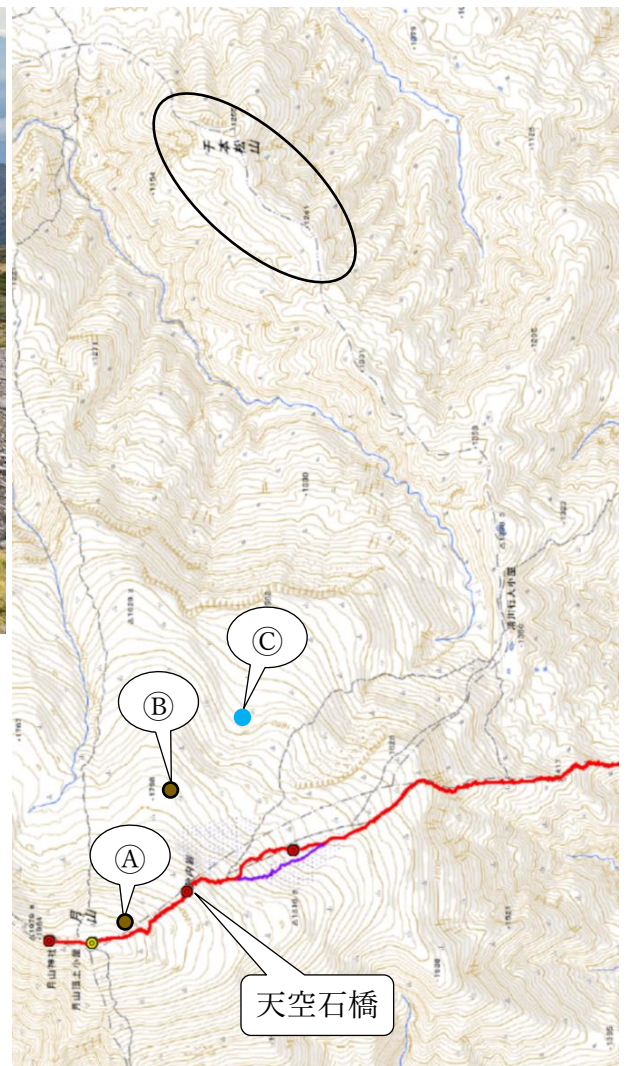


図-10b

その2；ところで、(A)と神饌池との間のことである。2024(R6)年10月25日(金)に撮影したものが図-12aのとおり、神饌池にパイプ(ホース)を入れた残骸がある。同図bは図-11の少し上方

(北方)にある同物残骸である。これらからは大雪城のいずれかの場所から湧水をくみ上げただろうという想像は出来る。



図-12a



図-12b

g. 魚の生け簀^す

山頂小屋、あるいは鍛冶小屋に住み込んでいる人達のタンパク源として何か魚を飼った・養殖したのだろうか。冷たい清流を好む魚——ヤマメやイワナだろうが。

h. 月山頂上小屋での使用？

図-13は、2025(R7)年8月23日(土)、月山に行った時に撮影した神饌池の状況である。右のとおり神饌池に差し込んだビニールパイプから、どこからか汲み上げた水が流れ出ていた。そして、左のとおり小屋に引込んでいると想像出来るパイプが見えた。水源はもちろん天空石橋ではないが、同池の東側下方の残雪・融雪水だろうと思われる。ここでの問題意識は水源ではなく、「神饌池」という名の通りの月山本宮神社祭神「月読命」に献上する神饌供物の中野重要な一品「水」の溜池を人間も使っているということである。神と人間が共食する「なおりい」という飲食の宴からは、不思議なことではないが、出羽三山神社社務所の方から聞いた処では“祭神に饗応するための専用溜池だから神饌池と言うのだ”という話とは少し違うのかなあと思った次第である。すると、昔、天空石橋からここに水を上げた可能性は否定できないが。



同小屋への給水口？



神饌池への取入口？

図-13

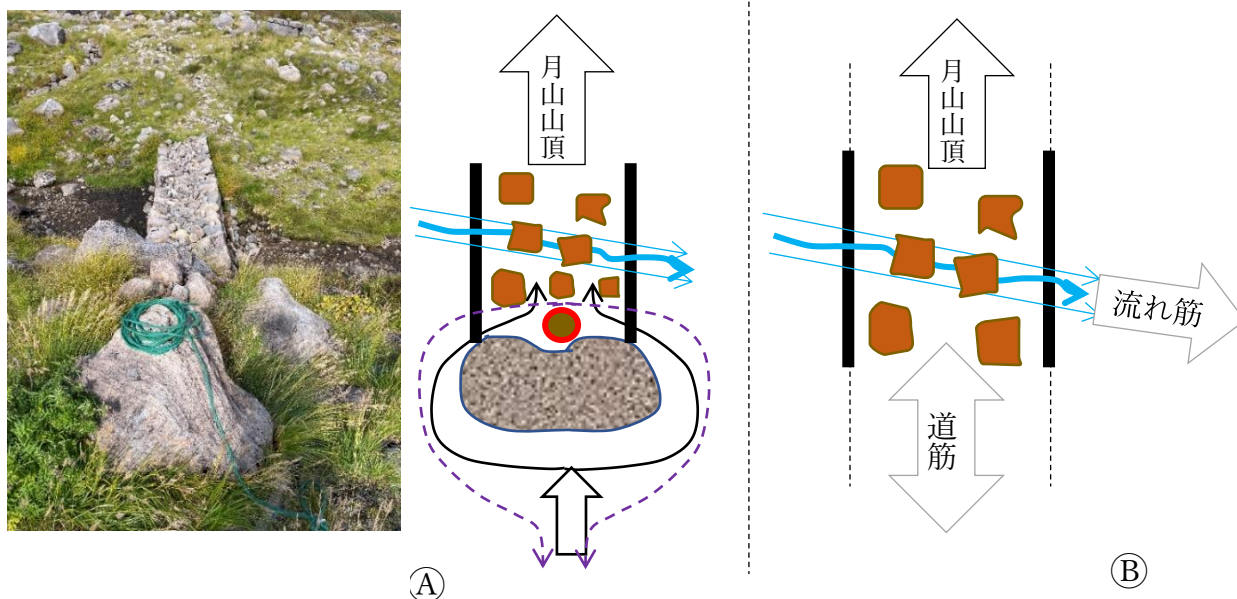
i. 産業遺構

この天空^{しゃつきょう}石橋の地点は自然公園法に基づく特別保護区域にあるはず。もしもその内にあるとすれば人工構造物を撤去せずに放置していることになる。それは如何なる理由にせよ、今更正直に申し出る、全容をあからさまにするということは不可能であろう。刑罰・時効うんぬんはここでは追求しないが、関係者は絶対に口を噤^{つぐ}むであろうと思う。いずれにしても、この命題に対する回答は、給水設備と関係があろうがなかろうが、どんな事情・背景があれ、今となっては（不幸中の幸い！）立派な産業遺構であると認識・認知するのが妥当であると考えている。

（２）精神的・宗教性（信仰）の側面

a. 源流信仰・水源信仰の観点

図－14、前記、何らかの工事と関係があったにせよ、元々、ここに、朽ちた橋らしきものが渡してあったのではないか、それを利用・修繕する形で現況のように補強したという見方も出来る。あらためて、月山を目指して歩く（登る）だけ、あるいは、本道寺を目指して歩く（下る）だけということからは、周囲にはもちろん樹木はなく砂利道状態なので、ここに橋がなくてもいくらでもルートは取れる。なお、この橋の前後に点在するケルン目印岩を結ぶと旧道ルートになる。しかし、ここになぜ橋を架けたのか、ここでなければならなかったという必然的な理由があるはずである、一見、不要・無用と思われる石橋をなぜ造成したのか、である。それら疑義を生じさせる理由は何なのか？ 何か宗教性を感じる。



図－14

同図のとおりで、下流側から上流側（山頂）に向かって歩くと大きな石に突き当たる、もちろん、越えられないことはないが、降りる時大きな段差が生じる、不用意に跳ねられない。左右のいずれかにかわして石橋に進むことになる、また、橋軸方向は大雪城融水の流れ筋に対して直角ではない。よしんば、単なる道に架ける橋であれば、こんな邪魔物を避け、僅か1 m 近くを上下にずらせばそれで済むことなのだが。

もう一つ、不思議なもの、木杭の残骸があることである。最初に気付いてくれたのは山形市内在住の堀米晴夫さん（山形県内で三角点調査では随一の研究者）で、2024(R6)年9月10日（火）に行った際に確認したということを、図-15のとおり同年9月11日（水）Facebookにアップされている。



図-15

そこで、図-16aは私が同年10月12日（土）行った時に確認し撮影したものである。確かに木杭を石で囲んでいる。対岸（北側）を確認したが、今の処、木の残骸を確認出来ていない。その目的は何なのか？ 例えば、同図bのように石を積む時に、両側から石を吊り下げながら移動・調節用のてこ（支柱）にしたのか？ あるいは、神様の依代としての五色の旗でも立てたのか？ その他の理由は？



図-16a

さて、殆んどの神社（お寺）は、参拝の動線を入口（鳥居）から本殿（拝殿）に直線的に結ぶのではなく、近くなったら向きを変えるように角度を付けており、一説には、神様の正中を外すために予め意図的に作っていると謂われている、これらと関係がないのだろうか。

（a）そこで、考えられる理由の一つは、源流信仰・水源信仰、水源・源流の神聖視ではないかと考える。五穀豊穰、子孫繁栄の源は水である。

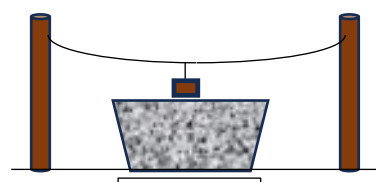


図-16b

その水の湧き出る原点は絶対に汚してはならない神聖地である。水の^{ほうかつ}豊渴は死活問題である、水神様を怒らしてはならないという思いから、ここを神聖な水源と見做し、
 拝む舞台としたのではないのか。

さて、月山は古来、山中他界信仰のもと祖霊神の集まる所であり、かつ、祀る神は月読尊が故に水（真水と潮水）を司る神である、それを農耕神として、大漁神として崇めて来たのである。そこで、月山南方麓の集落の、もっと広く見れば内陸側の人々とから見た場合、何かにと恩恵に授かる水はどこから来るのかとなる。理屈なしに、それは大量の降雪を受け止め、万年雪と称える月山となる、その象徴は大雪城だ、となる。つまり、月山の大雪城が水源地帯・源流点と認識する。俯瞰すれば大雪城融水が

水源となって、四ツ谷川^{からす}、烏川、あるいは、清川（本沢、立谷沢川）に流れて来るだろうと直感する。

一方で、大雪城の残雪は時期とともに変化することから流れ筋が変化し、その三つの川への流入量（流出量）は一定・均等ではなく変化するだろうが、その川の恩恵を受ける月山麓の南方集落から見れば、どの川にどれだけ沢山流れたのか？ 分水量はどちらが多いのか？ などの優先順位の問題ではなく、大雪城そのものに対して大きな感謝と強い畏敬の念を持ったということであろう。

雪解け水は次第に細って行く中で、晩秋まで残雪があり、その水が集まって湧水地のようにになっている所はこの『天空石橋^{しゃつきょう}』地点なのだが、この降雪前の少量の残雪融水がどの川に流れて行くのかが問題では無く、以上のような全体俯瞰の上で、人々に多大な恩恵を齎す月山、すなわち大雪城の代表地

点・象徴点として、『天空石橋^{しゃつきょう}』の所を源流部・水源と見做し・見立て、その水を穢^{けが}してはならないたという思いを込めて、その信仰心を具象化するために、この細い小さな川に橋を架けたのではないか。

すなわち、「有源之井水^{せいすい}」と観想した水の聖地である。したがって、水源点を真正面から拝みたいとなる。すると、川筋に入って拝むことになるが、それでは土足で水場に入り、例え、靴を脱いで裸足で入っても水を汚すことになる。これではまことに失礼千万の極みとなる。よって、橋を架けて、その上から源流・水源点を拝んだものと想像している。いわば、源流・水源の神聖視シンボルにしたということだろう。

（b）精進潔斎^{みずごり}の水垢離場としたのではないかな？ まずは丸山茂著「神部 岩根澤之面影」（同刊行舎）P323にある一説に触れる。「一・・・万年雪（月山の大雪城）を渡り切ると安山岩から成っている胎内岩^{さんげきゅうあく}に出るのだが、ここで過去の懺悔^{さんげきゅうあく} 舊 悪を洗い直して、心身共に精進の境地で参詣する心構えを作るため、左右両手に六厘^{つか}を握んで胎内潜り^{きょう}するのもまた興ある（面白い）ものだ・・・」とある。祖霊が集まるという岩場の胎内潜りも精進潔斎の所作（行為）に繋げる観方である。それも、月山山頂の神社本宮（大権現堂・御室）目前のここにおいてである、これをヒントにする。本道寺登り口においては、神域に参る覚悟と身支度を整えてここまで来た、古来の『高清水（今で言う元高清水）』でも精進潔斎を嚴重に執り行^{いえど}って来た、と 雖も、いよいよこの水の源流点は、一時この世と別れて、一段次元の高い世界に入るという覚悟のもと、念には念を入れて精進潔斎・禊ぎの心を思い起こしたということではないだろうか。裸になってこの水溜めに入るということではなく、残雪の冷たい水を少し掌に汲んで体に散水すればそれで十分な儀式になる。また、これから向かわんとする湯殿山はこの点から図-17のとおりほぼ真西方向にある、湯殿山の御宝前は熱いお湯が滴り落ちる源であるが、そこは火（熱）の源である、対してここは水の源である。不動明王をご本尊とする修験道の、対照的な水と火を表裏一体として崇める信仰において、ここで三山総奥の院「湯殿御宝前」を遥拝し、生まれ変わり・蘇りの覚悟をする結界の点と見立てて、あえてここに線を引き、渡るための橋を造立したということではないだろうか。三途の川をも重ねたのかもしれない。

b. 洪水調節・堰堤機能の観点

「何も小面倒くさいことではない、堰堤機能を託した砂防ダムだ。」という見方を数人から聞いている。この天空石橋の貯水量はざっくり大きめに計算して、幅 7.5m×高さ 1.2m×奥行 10m=90 m³程度ある。この程度の堰き止め流量を以って、国土交通省がいう砂防ダム・砂防堰堤同様の本来機能を発揮するのだろうか。もちろん、大雪城の雪が一気に融けて大洪水の引き金になるということはないだろうが。あるいは大洪水に至らなくても相応多量の融水があるとすれば、水流^{みづなが}れはこの橋を難なく越えて行

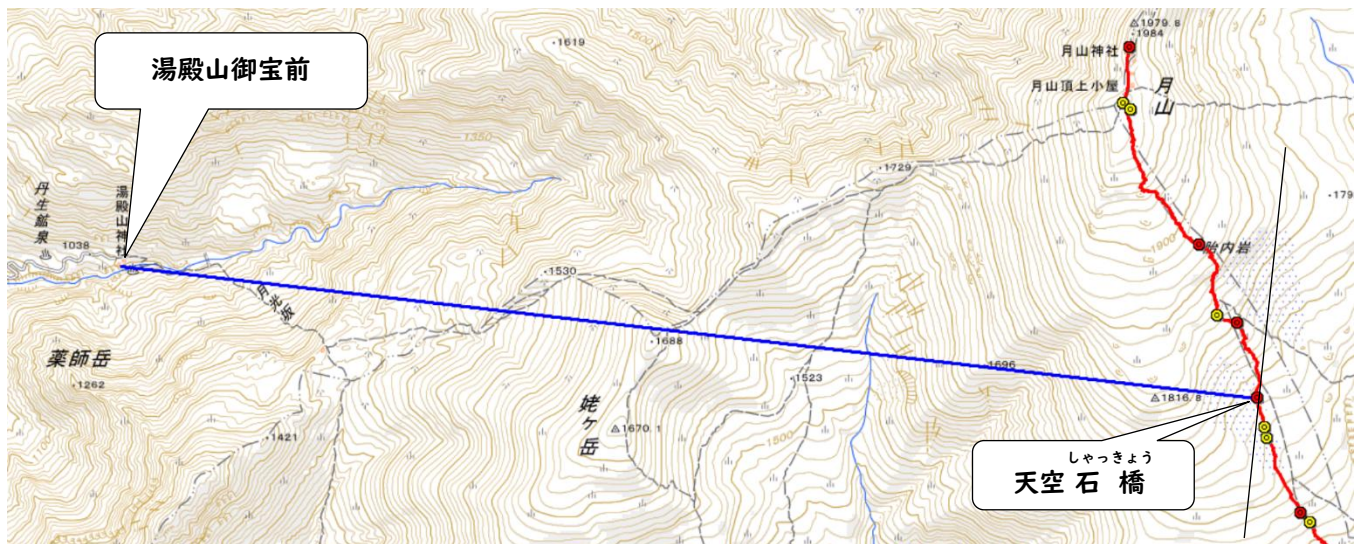


図-17

き、貯水・流量調節機能は意味を成し得なくなる。

水は量の力もあるが、傾斜が増せば勢いが付く、いずれにしても水は物理的エネルギーを持っており、時に大暴れをしかねない、もちろんこの地点では生じないだろうが。多くの所で堤防が整備されていない時代にあつては、麓では洪水被害は数年おきに襲来していたかもしれない。人々の思いは、水は途切れなく欲しい、しかし、暴れて欲しくないという境地になれば、お天道様に、神様に、お月様に祈るしかなかったのだろう。前記したとおりの水の源流点大雪城の所に、調節加護の祈りを受け止めてくれる水神様の住まう宿として、このような石橋に託したことだろう。水神と謂えば、『古事記』のいうみづはのめのかみ 弥都波能売神、『日本書紀』のいうみづはのめのかみ 罔象女神はあろうが、ここは月山の祭神「月読尊命」のお膝下である、言うまでもなく、信仰上、月と水は抜群の親和性を持つものであることから、心中に「月読尊命」を勧請してかくれやど 隠宿と観想したのではないかと想像している。堤部を渡るということは、神様を踏み付ける行為でありぼうとく 冒涇にならないか、ということの疑義に対しては、渡る行為はむしろ水神様の懷に抱かれる、一体になる有り難い祭りごとと捉えていたことであろう。あちこちにある胎内潜りの観念と同様のことであろう。

要は、純粋な土木工学上の現実的な自然現象への対応・対策ではなく、精神性における風雨順時を願う心と同様に、程よく雨が降って、程よく雪が解けて、程よく下手に流れ来て欲しいという人々の願い・祈りを橋そのものに託して具象化するために造立を図ったということであろうと推察する。

5. この橋（堤）の位置と向きは何を物語るのか

(a) 過去の当該石橋行きの GPS トラックログの再検証と、2025(R7)年 8 月 23 日(土)にデジタルコンパス（スマホアプリ）を以って現地確認した結果を図-18・19 により説明する。

橋の中央に立ち、「大雪城」を正面に、橋軸に並行するよう両手を広げて顔を上げ、①視線の先端を伸ばして行くとほぼ真西方向の「湯殿山」に突き当たること。②正面視線と橋軸方向は直角に交差すること、よって③橋軸方向は地理上南北から約 8 度右回転にずれていることが分った。

(b) 橋軸は南北方向を向く。橋軸は月山を向くのではなく、神聖な真正南北に漸近する方向を向いている、これは何を意味するのか、ここでは簡単に記述するが、古来易経等中国文化の影響を受けて「南北」方位に重要な意味を与えている、北に冬至、南に夏至を配当し、北には天空不動の星「北極星」が鎮座し、かつ、同星を神格化した陰陽二元統一の太極の居所と見做して来た中において、為政者にとっては「北を背に南面す」の位置取り（太極）を以って世の安定を齎し、民衆からはその北（太極）に向かって拝むことが、四季の順当な変化による適度な日照降雨と五穀豊穡を齎すという信仰思想が根付いて来たことに由来するのではないだろうか。その細部の意味合いについては別記の、第6巻共通的補完資料の〔第6巻－（1）「左上右下」〕を参照されたい。

(c) 橋上で拝む姿勢の交差点。人が立ち両手を広げたその姿において、湯殿を向いた目線と両手方向は90度の開きとなる、つまり、人間の中心はその両方向軸の正中交差点となる。すなわち左右と（平面上）遠近が交差する点、すなわち「もの・こと」の集中と発散が交錯する点であり、「人と橋」の中心が重力線上で重なる全体統合の一点である。よって、ここにおいて陰陽二元対立で蒙昧する自己撞着からの人間脱皮（統合視座修養）を誓ったことであろう。

(d) 向く対象は『湯殿山と大雪城』である。目前に水の宝庫『大雪城』、その先には火の象徴「湯殿山御宝前」、水と火、冷と熱、月と日の陰陽二元相対(待)性自然原理具象化の構図が読み取れ、祈りの舞台と見立てたことが見えて来る。このようなバランス性はお大師（空海）晩年の大書「秘蔵宝鑑」で熱く説いた「中道正観」の視座に繋がる。

6. 信仰遺構

以上の命題に対する回答は、前記、産業遺構とする見方と関係はないと 雖も、今となつては、立派な信仰遺構であると認識・認知するのが妥当であると考えている。

修験道の思想・哲学の視点で整理すると図(表)－19のとおりとなる。

思想的根拠			左記現地対応の仮説
陰陽二元	陽	陰	□A；「湯殿山（御宝前）」を拝む祈り（観念遙拝）の舞台 □B；「大雪城」を水源基点、すなわち源流部の旗印として『水神』への感謝を捧げる祈りの舞台 □C；『水』に対する堰堤機能（洪水防止・水量調節に係る一時貯水）を託す祈りの舞台 □D；小屋用の生活飲料水一時的貯水(貯蔵)施設（水は生命維持装置の一つ）
対応御山	湯殿山（御宝前）	月山（大雪城）	
二元代表要素	熱・火	冷・水	
本尊	大日如来	阿弥陀如来	
本件	□A	□B・□C	
	□D		
ジェンダー	（男・女）	（女・男）	
俯瞰大局すれば、宇宙－天空と大地に対する感謝祭儀の舞台に見立てたのだろう。			
図(表)－19			

・少し離れるかもしれないが、事情・訳ありで月山には行けたが湯殿山に行けない（逆もありか）人例えば、羽黒から至本道寺直行旅人、山師・鍛冶職等）の礼拝所？ 月山鍛冶の隠れ作業所？ 小さな手作り舟を持参、浮かべて「石船」に共通する意味合いで祈ったのか？

・このような場の一点の選択は魔性の成せる技なのではないか！

5. 『天空石橋』の命名事情

名付けは大沼が直感し、その意味付けは布施と宮林の思惟を採用したものである。三山の宗教的歴史に鑑みて、羽黒山系と湯殿山系との司祭権を巡る宗教勢力論争や距離的に近い旧日月寺（岩根沢）や志津と本道寺との参詣客争奪などの利権争い・揉め事はあったにせよ、歴史の大きな潮流・変遷の中では一時的なことであろう。元を糺せば、共に密教を根底とする宗教世界である。天台系羽黒中興の祖の「天宥別当」にせよ、真言系湯殿山開祖の「空海」にせよ、活躍した時代は違うにせよ、それぞれを象徴する歴史上の大人物である。一面では対立的に捉えるが、他方では共に出羽三山の興隆発展に大きく貢献した歴史上の大人物である。

また、昔も今も、民衆からみれば、一般の道者・行者からすれば、神社・仏閣に係っては、宗教宗派や神仏（祭神・本尊）の違いなどはまったく問題視しない。自分よりも遥かに崇高なものとして、理想郷の教主として畏敬の真心を以って崇め奉る対象なのである。

これらを踏まえて、多様性が尊ばれる今日の目線から、相違を乗り越えて個性そのまま是認・対等互啓（恵）を啓発する涵養（寛容）精神を以って「天宥」の天と「空海」の空を採用・連結し、また、あの地点から大雪城上空を望んだ時の青空の天空に繋がる眺望とを併せ持って、大地から『天空』へ架けた石橋、『天空石橋』と命名したものである。もちろん、「天宥」と「空海」が活躍した時代と宗教哲学はまったくというくらい異なるだろう。しかし、次元が違うと思われるものを敢えて意図的に接着して命名したのである。

なお、名称付けするとすればこれは「石堤」の方がどうなのかとの意見もある、「流れを堰き止める堤」の機能的精神については前記のとおりに意義を評価した。その上で、その場合は堤防の上を渡るということだが、南北の兩岸を渡る・繋ぐという行動と、るる記述した意味合い（精神性）からは、むしろ「橋」とした方が、含蓄がある、深みがあると考えたことから「天空石橋」と名称付けしたのである。

6. まとめ

ロマンを掻き立てる遺構である。過去に如何なる理由があったにせよ図(表)－20の全体事情を踏まえば、現時点においては新しいものの発見である。産業遺構と信仰遺構の両方の性格を具有する歴史遺構であると見做して何ら支障はないものとする。

絶対に語れない内輪（私的）事情	客観的事情
（石橋の堰き止めにより飲料水供給池用とし、一旦神饌池に汲み上げて利用したという仮説依拠） ・神饌池の水は神様のためのもの、人間の飲用には絶対供しないという硬い掟は破れないこと。 ・自然公園法施行後の物であれば、その地は自然特別保護区内にあり、無断工事の可能性大となり、法に触れる恐れが懸念されること。仮に着工に許可があったとしても、放置は原状復帰とならず違法性が高まる。	・正規の工事手続きを取ったとしても<u>実施結果を踏まえた記録文書の存在等</u>厳然たる事実・証拠が見付からない（公表されない）こと。 ・<u>存命し、工事に直接従事した当事者</u>・証言者が表れないこと。
このような状況下においては、真実を語る人は表れず、よって、真実は永遠に解明出来ないだろう。	
図(表)－20	

以上を全体総括の上で、

あるがままの意味不明、謎の物体であることを最大限尊重の上で、あえて、隠された意味付けを探ることにする。

- ✓^(学)方位性における三次元立体時空象徴としての東西南北上下の交差点
- ✓宗教性におけるあらゆる仏「如来（阿弥陀如来、薬師如来等）・菩薩・明王・天部」の象徴としての大日如来（ここでは出羽三山総奥の院としての湯殿山）
- ✓修験道の思想・哲学

の3要件が重層化・複合化した深層において、俯瞰大局すれば、宇宙－天空と大地に対する感謝祭儀の舞台に見立てたのだろう。

さて、**今となっては、**

- ☑「**天空^{しゃつきょう}石橋**」は**周辺景観を損ねる等の実害や環境への悪影響を齎すものではなく、一方で人工的なものである。**
- ☑**過去に如何なる事情があったにせよ、過去の事情を詮索する、爪を立て^{とが}咎める必要はない。**

ことを踏まえて、いずれにしても、今となってはあらたな息吹を吹き込み、新しい価値の創造という世界で語ればよいことである。

よってここは、設置目的の経緯は如何様であれ、ロマンを掻き立てる素晴らしい貴重な歴史遺構（産業遺構とは見なさい）である。ここは「高清水通り“謎の源流Gスポ”」（Gは great、スポは spot）と通称する。

過去に如何なる事情があったにせよ、人工的なものである。これからは、月山水源聖地のGスポット（great のG）シンボルであり、“謎の源流Gスポ”と称し、素晴らしい歴史遺構——前記で仮置きした産業と宗教の言葉ではなく——として捉えて行くこととする。

（ドローン撮影を試みれば、西川町の観光ポスターに十分活用出来るはず。）

<end>